

特定非営利活動法人21世紀水倶楽部 オンライン研究集会 報告

編集委員会

本法人は一般市民に対して、環境保全についての知識の普及と啓発に関する事業を行い、環境保全事業の推進に寄与することを目的とする法人であり (1)環境の保全を図る活動、(2)科学技術の振興を図る活動、(3)国際協力の活動、を行っている(ホームページより)。

本研究集会の開催趣旨

雨水枡が蚊の発生源になっていると指摘されている。平成26年には東京の代々木公園を中心にデング熱により約160人の感染者が確認され、雨水枡や池等の清掃、薬剤散布が行われた。雨水枡には泥溜めを設ける規定があるが、雨水の滞留が蚊の発生原因になっているとされ、自治体によっては薬剤の散布も行われている。地球温暖化に伴う蚊の生息域の拡大、海外との往来の増加に伴い、感染症の流行が懸念されている。舗装の普及による泥溜めの役割の減少や維持管理作業の負担により、雨水枡の機能や構造についての議論がされており、下水道施設計画・設計指針の見直しも行われた。本研究集会では、道路の雨水枡を含めて、雨水枡や泥溜めの現状と課題について紹介するとともに、その役割、設計や維持管理のあり方について考える。

開催日時：令和4年1月28日(金)

開催方法：Zoomでのオンライン開催

参加人数：70名

プログラム

(1)蚊の発生抑制等から見た雨水枡の現状と課題

管清工業(株) 本社技術部部长 深谷 涉

公共(汚水、雨水)枡は下水道管理者が清掃等を実施しているが、住民から悪臭や排水不良の苦情があった場合の緊急的な対応として実施されることが多い。取付管起因の陥没が頻発しているとの情報もあり、定期点検の必要性が高い。

宅内(汚水、雨水)枡は住宅所有者が自ら行うことになっているが殆ど実施されておらず、多くの場合実害が出てから対応するため、補修費は高額となることが多い。

道路雨水排水枡の維持管理は雨水排水枡の蓋上のごみや落葉は住民の自主清掃が要請されている。また、枡内部の清掃は道路や下水道の管理部署で梅雨、台風期の前等に一部で

実施しているが、殆ど行われていない。

雨水枥は泥だめに水が溜まり蚊の発生源となっているが、維持管理が殆どなされていないこともあり、構造上の弱点が負の連鎖として表面化してきている。この連鎖を断ち切るには、定期的なメンテナンスや雨水浸透枥の採用、泥だめのインバート化等の改善が必要と考えられる。

(2) 東京都における雨水枥等の設置と管理の現状

東京都下水道局中部下水道事務所お客さまサービス課統括課長代理 石井 健二

東京都における枝線管路や排水設備の設置と維持管理のしくみ、公共雨水枥や道路雨水枥等の管理の現状と問題点について報告された。泥だめ付き雨水枥は、東京都下水道局以外の道路管理者、公園管理者、個人で行われている。新設届け出時に技術的指導を行っているが維持管理の実態は把握していない。多くの区では蚊の発生対策として昆虫成長抑制剤(IGR)の投入を実施している。泥だめ廃止の相談はきていない。

(3) 大阪市におけるマンホール泥溜め廃止の経験

(株)東京設計事務所顧問・特任理事 山口 登

大阪市では、マンホールの枥のなかに配管と同型の溝を切るインバート化事業を1994年～2013年に行った。対象マンホールは約14万カ所にのぼり、インバート化は58億円(1カ所あたり4万6千円)かけて12.5万カ所で行った。

舗装の進んだ地域においては、雨水枥泥だめの効果は限定的なものとなっており、すべての雨水枥に泥だめを設置する意義は少なく、蚊の発生やゴミの堆積などが生じ、むしろ弊害となっている。蚊の発生問題については、早くから公衆衛生の専門家から指摘されており、泥だめを設置する際は防蚊対策を講じ堆積物の適正な管理が必要である。蚊による感染症流行を見据え、既存の雨水枥の構造改造が望まれる。そのためには雨水枥の構造基準を定めた法規の改正が必要である。

(4) 雨水枥で発生する感染症媒介蚊

国立感染症研究所昆虫医科学部長 葛西 真治

蚊が媒介する感染症、ヒトスジシマカの生態と分布、温暖化と国際化の影響、また、下水道と蚊の発生の調査結果等について報告された。有水率や幼虫発生率は年や月によって変動する。愛知県ペストコントロール協会の調査では、48%で水が溜まっており16%で幼虫が発生、愛知県全体では25万8千個あまりの雨水枥から幼虫が発生すると推測される。横浜市泉区の調査では有水率は90%、蚊の発生率は64%だった。

首都圏において成虫用トラップで捕獲される蚊は疾病媒介蚊である。雨水枥からはヒトスジシマカが大多数を占める。